

海の牙

水上勉
社会派傑作選2



上
勉

の
牙

派傑作選
2

朝
日
新
聞
社

水上勉社会派傑作選

2

海の牙

爪

耳

定価 750円

昭和47年10月20日 第1刷発行

著者 水上 勉

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社 東京／北九州
大阪／名古屋

©1972 水上 勉

0393-240122-0042

目 次

海の牙

序章	猫踊り	7
第一章	不知火海沿岸	12
第二章	保健所の男	21
第三章	伽羅の香	30
第四章	失踪船黒久丸	39
第五章	ある密輸団	49
第六章	鴉と死	58
第七章	靴跡の疑惑	65
第八章	結城宗市のノート	73
第九章	郁子	85
第十章	夜汽車の中	97
第十一章	死んでいた男	107
第十二章	湯山温泉	119
第十三章	怒りの街	131

第十四章 背景

第十五章 新しい事実

終章 死んだ海

爪

第一章 ある失踪者

第二章 琴の糸

第三章 木之本警察署

第四章 桑の果はなぜ紅い

第五章 異国の来訪者

第六章 竹末順子

第七章 熱い壁

第八章 迷路の隅で

第九章 食虫植物

第十章 ポール・マーシャル

第十一章 発展

257 246 236 229 220 210 202 193 185 172 163

159 149 138

第十二章 協力者

第十三章 影

第十四章 紅い爪

耳

第一章 耳が落ちていた

第二章 吉崎町と富坂のあいだ

第三章 鳩

第四章 ロック・アウトとステー・イン

第五章 雪と木の町

第六章 名刺

第七章 任意の一点

第八章 耳はなぜ落ちていたか

「海の牙」について

装
幀

永
田

力

422 414 396 383 373 351 335 315 297 280 270 263

海 の 牙

序章 猫踊り

陽がかげると、岩の巻貝が波打ちぎわに落ちこぼれた。

貝を拾っている子供は五人いた。中に女の子が一人まじっている。どの子も裸足だった。男の子たちは、汚れたメリヤスのシャツと、つぎはぎのある木綿のシャツを着ていた。みんながズボンの裾を膝までまくりあげている。女の子は赤いふるびたメリンスの着物だった。その着物の膝のあたりに穴があき、裏生地が見えた。女の子も裾をまくりあげ、その端を縄のように細くなった兵児帯にたぐりこんでいた。膝がしらの白い子である。やせているので、くるぶしがとび出ている。

どの子も、古い空罐や、角のまるくなった弁当箱をもっていた。磯波はゆるく、土色に陽焼けした子供たちのふくらはぎのあたりへ間断なく打ち寄せていた。

ビナと呼ばれているその巻貝は、田螺のような三角形の小さな貝である。子供たちは空罐や弁当箱にこのビナを拾いあつめていた。貝は家に持ち帰って母親の手で湯通しさ

れる。それが夕食のかわりになるのだった。

四月はじめの海の風はなまあたたく、水は冷えていたが、岩と岩のあいだや、砂浜へ入りこんでいるたまり水はぬるんでいた。

青い水苔のひかる岩の上に、一人だけよじ登って腰をかめていた男の子が、とつぜん磯のほうを見て叫んだ。

「ウメコ、どげんしたと？」

その声で、水の中にいた子供たちはいっせいに砂浜を見た。さきほどまで水際にいたはずの女の子が、砂の上で、膝を組み合わせるような格好になり、前のめりに倒れる瞬間が見えた。

「ウメコ、どげんした？」

また、岩の上の子が叫んだ。

女の子は返事しなかった。砂に腹ばいになったまま、ぎんばら髪を一、二度振るように動かし、髪の上に砂と水がかかり、チカッと光った。倒れた瞬間に、女の子はアルマイトの弁当箱をひっくりかえし、ビナがこぼれ出していた。

「ふるえとるぞ」

別の男の子が水しぶきをあげて砂浜に走った。そして、倒れた女の子の顔をのぞくと、すぐ振りかえって叫んだ。

「猫のごつ、ふるえとつち……」

岩の子も、近くにいた子も、獲物入れの罐を胸もとにも

ちあげて女の子のそばに走ってきた。

「どぎゃんした、ウメコ」

背のたかい年長の子が、さしのぞくようにして顔を見た。膝がしらを砂にめりこませているウメコの裏がえしになった足が小きぎみにふるえている。くちびるの色が紫がかっている。それが何度も大きくふるえた。ウメコは何か言いたそうだったが、声が出ないようである。そして、曲がっていたその細い手をのばした。這いつくばう格好になった。膝のふるえはつづいていた。何か口の中で言ったようだが、はつきり聞えず、ウメコは上体をよじるようにくねらせた。うつむいたまま、手足をふるわせているのだった。

「腹が痛かじゃなっか」

そう言って年長の男の子は、また顔をさしのぞいた。急に、この子の顔色が変わった。だらしくあいているウメコの下唇から、涎が長く垂れおちるのを見たからである。白い水飴のような涎であった。ウメコのうつろな瞳孔は砂浜を見ていた。が、すでに視力がなかった。こぼれたビナ貝をウメコは砂にめり込ませながら手をつかえ、う、う、う、とかすかな呻きを訴えた。それから、やにわに涎の糸をひきながら這いだしたのである。

年長の子はへこんだ眼をまんまるく見開いていた。が、

急に踵をかえすと、半泣きの顔になって崖上の村へ走りだしていた。

せり上がる傾斜の崖には、ところどころに黒い蜜柑の木が見られた。そこにトタンぶきの屋根を光らせた小さな家が、乳色の霧の中でかすんでいる。磯から崖に上がる坂道は九十九折になっていた。石垣と青草のはえた道が段々になって見え、その道を駆け登る子供の姿はみるみる小さくなった。空罐が子供の腰でおどり、遠くまでかわいた音をたてた。

子供はトタンぶきの家の前までくると、積みあげた茶色い石段を一気に飛びこえて叫んだ。

「ウメコが猫踊り病にかかったあ、お父ちゃん、おっ母さん……」

母親は台所にいた。父親は母屋の隣の網小舎で地曳網をつくろっていたが、竹針をもったままちよつと子供のほうを見ただけであった。すでに母親は表に飛びだし、顔色をかえていた。

「おっ母あ、ウメコが大変だよ」

母親は、せっかちに走る子供からおくれて小走りに歩いていたが、磯が見える地点にきて、遠くにむらがっている子供たちの姿を見たとき急にやせた顔をひきつらせた。

ウメコはうす目をあけていて手足を間断なくふるわせて

いるばかりだった。ものが言えないのだ。

「ウメコ、ウメコ、ウメコ……」

母親は髪をふり乱し、汐焼けした手で少女の肩をしかりつかんだ。はげしい痙攣がつたわってきた。やにわに母親は、うつ伏しているウメコを小脇に掻き抱いた。涎が長く糸をひき、母親の手に落ちかかった。

「ウメコ、ウメコ……」

絶叫する母親の顔は涙に汚れ、まっ青にかわっていた。

突然、彼女は少女を抱き上げながら崖に向かって走り出した。母親の膝がしらが紅い腰巻を割ってむき出しのまま遠ざかって行った。

「お父、お父……猫踊りにかかったと、お父」

網小舎の中から父親が飛んできた。ウメコを抱きあげた。母親は敷居ぎわに手をつき、夫の足もとにしがみついて泣きくずれた。

「おら、駐在へ行ってくっから」

そう言つてウメコを家の中の庭の上に寝かせた。その瞬間、ウメコは汚れた砂だらけの尻をまるだしにして庭の上をころげ廻った。やがて、くるくると宙がえりをはじめた。苦痛を訴える少女の目に、けもののような光が見えた。

トタン屋根の暗い下から、村の静かな空気をひき裂くよ

うな母親の泣きわめく声がいつまでもひびいていた。

九歳になるこの少女が、あとで「水瀉奇病」といわれる

原因不明の恐るべき第一号患者となった。

ウメコは、発病して十五日目に水瀉市立病院で死んだ。

死ぬ間際に、この少女は看護婦の制止する手をはねのけ、体を宙に飛びはねたり、くるくると反転させたりしたのち、悶絶した。

入院した直後、医者をはじめ日本脳炎ではないかと診断した。しかし、食物も水も受けつけない上に、手足や腰をふるわせているばかりで、手のほどこしやうがなかった。

すぐに極度の栄養失調になった。頭でっかちにオガラのようにやせ細ったウメコは、お玉じゃくしのように足をふるわせて寝ていた。十五日目の朝がた、医者や看護婦が茫然と見ている前で、突然、起き上がると一時間ほど激しい痙攣のような発作をつづけた。狂死したのである。

これは、猫の死にさまと似ていた。この地方には、昔から猫踊りというえたいの知れない病気が猫を襲っていた。魚や貝のくさった部分を猫が喰う。病気にかかると急に手足を痙攣させ、二、三日目にやせ細り、地べたをころげ廻ったり、宙がえりをして狂死するのだった。どの猫も、うす目をあけたまま口からはげしく涎を垂らしながら死ん

でいった。

ウメコの場合、両親は日頃から顔色のわるい娘を気にして、あわびの腹わたを喰わせるのを日課にしていた。あわびの腹わたは薬だという習わしがある。父親は、家の者たちがビナや小魚を喰っていても、娘にだけはあわびを喰わせた。病氣にかかる三日ほど前、ウメコは、朝飯のときボロリと茶碗を落した。一度持ちなおしたが、すぐにまた落としたのだった。麦飯がこぼれたので、父親は叱りどばした。その日、学校へ行きしなにも、ウメコは出口のところで草履がはきにくいと訴えていたが、いつのまにか出て行ったので両親は氣にかけないでいた。その日、学校では一日じゅう運動場の隅にちこまり、ふるえていたという。しかしウメコは、帰ってからこのことを両親に告げていなかった。

病院で狂死した少女の話は、尾ひれがついて恐ろしい病状の噂をうみ、部落じゅうにひびいていった。

「魚と貝に毒があるんじゃない。猫が喰って死によったが、人間もかかるようになったんじゃない」

この星の浦部落では、急に誰もあわびの腹わたを喰わなくなつた。と同時に、漁師部落からあわび漁は消えたのである。あわびを買ってくれなくなつたからだ。しかし、あわびだけに毒がまじっているというはつきりした根拠はど

こにもなかった。ボラにも、チヌにも、伊勢エビにも毒がまじっているかもしれないのだ。この恐怖は、やがて、同病患者が続出するに及んで村の漁師たちを打ちのめしたのだった。

星の浦部落から約一キロほど離れた湾ぞいに滝堂という漁師部落があり、五月二十四日の朝、そこで大人の患者が出た。三十二歳の主婦であつた。罹病して一カ月目に、彼女はカマキリのようにやせ、市立病院でウメコと同じ死にざまをした。猫同様に狂死したのである。

噂は大きくひろがつた。「魚ば喰うと死ぬぞ」「魚に毒があるんじゃない」この主婦がいつも食べていたボラの刺身が、ついで部落人の食膳から消えた。

さらに患者は増えはじめた。滝堂部落の主婦が死んでから八月初めまでのわずか二カ月間に、星の浦に漁師二名、大工職が一名、滝堂部落に女が二名（うち少女一名）、米の浦に男一名、小学生が二名、どれもみな似たような病状になり、病院に収容された。

魚の毒が猫にだけうつるという見解は改めねばならなくなつた。人間を猫踊り病にかける毒が魚の腹に潜んでいるのか。漁師は魚が売れないばかりでなかつた、自分たちも、いつ病氣にかかつて狂死するかもしれないからである。

噂は部落だけの問題でなくなり、病院のある水潟市にひろがった。昭和三十一年晩秋のことである。

水潟市は熊本県と鹿児島県境にちかい海岸にあった。海は不知火の名で親しまれている八代潟である。市は県境の山系から流れてくる水潟川の河口にあったが、近辺には大小あまたの岬が海にむかって櫛目になって没していた。入りくんだ幾つもの小湾は、内海らしい落ちついたたたずまいで、波もあらくなかったし、いつも紺青の水が静かな山影をうかべていた。

市は工業都市である。しかし、目だった工場は一つしかなかった。東洋化成工業水潟工場というのがそれである。

工場は駅前の卵形になった広場から百メートル入った地点に、巨大な軍艦のような相貌で建っていた。硫酸、塩化ビニール、醋酸、可塑剤などが生産の中心になっていた。

そのうち、塩化ビニールが主力だといわれた。透明な風呂敷や汚れのおちるテールクロスが繊維を革命したように、その原料である塩化ビニールはこの工場の伸展の原動力になった。水潟という小さな漁師町が、人口五万の市に昇格して周囲の漁師部落を併合したのも、革命といえないこともなかった。この事件の起きた年度は、五万の人口のうち約半数が工場関係労働者であり、この市の市民だっ

た。

市の駅前に工場がデンと正門を構え、幾本もの高い煙突から黒煙が吐きだされている。空が灰色に染められている。有様は、暗い気持の漁村とは反対に活気にあふれていた。市には工場から出る化学薬品とカーバイドの残滓の臭いがそこらじゅうに充ちていた。それは、すえたようなすっぱい臭いであった。花粉のように舞いおる石灰が家々の屋根瓦を灰色に塗りがえたように、この臭気は、どここの台所をも吹く風に溶けこんでいった。

市の背後は屏風のように三方から山がかこんでいる。緑濃い潤葉樹と針葉樹が豊かに茂っていた。岬もまた黒々とした樹林である。その岬が山ふところに入江を抱えこむあたりに急傾斜な断崖が見え、裾のほうには散在した漁民部落が見えた。漁師の家はトタンや杉皮ぶきの粗末な小舎のようなもので、背中を向け合ったり、横向きになったりして、まちまちに建っていた。奇病患者の出た部落は、これらの漁民部落である。第一号患者の出た星の浦は、やはり市の地籍に含まれていた。

熊本市にある南九州大学の医学部に「水潟奇病研究班」というのが自発的にできたのは、それから半年ほどたってからのことである。星の浦部落を皮切りに増えだした患者

は大学病院へ入れられ、臨^{りん}床^{じょう}的^{てき}にも病理学的にも調査は開始された。病氣の原因は、駅前にある東洋化成工場の排水口に近い湾に、ドベ（海底泥土）が三メートルも沈^{おち}澱^{でん}しており、その中に水銀が含まれ、このドベで汚^お染^{せん}した海水中に棲^{せい}息^{そく}する魚介が有毒化しているらしいことがようやくわかった。奇病患者が猫のつぎに魚をたべる。排水口付近の漁民だけが奇病にかかるというのも、その証明の材料であった。

おどろいたのは東洋化成工場側である。そんなはずはない、日本に塩化ビニールの工場はほかにもあるし、水濁市にかぎって奇病が出るというのはおかしい、だいいち、十年も昔から湾に排水しているのに、今になって病氣が発生している、何か他の原因だろう、と反^{はん}駁^{ぱく}してきたのだ。

この対立は病因究明が解決されていないために、紛争は今もなお続いている。病人は増える一方である。四年後の昭和三十四年秋には、八十名のうち三十名が死亡するという事態になった。世間で問題にしはじめたのは、星の浦の少女ウメコが死んでから三年後のことであった。

第一章 不知火海沿岸

木田民平は、この水濁市内古幡^{ふるはた}の川ぞいの地で外科医を開業していた。彼はその年四十一歳、開業してから十一年目になっていた。

木田は二百二十ccのオートバイに乗って往診に行く。くぼんだ目と小鼻のふくれた顔に愛嬌^{あいけう}があり、どこかぶっきら棒^{ぶっきらぼう}で磊落^{らいらく}なところのある木田は患者には受けがよかった。請^こわれて彼は水濁市がまだ町制時代からの警察囑託^{しよくたく}医もかねていたし、学校にも関係していた。治療も親身だと評判がよい。しかし、いくら評判がよくても町医者であるから繁栄は知れたものである。市には市立病院、工場には付属病院、その他種々の公共医療施設が整ってきだすと、木田の台所もそうせいたくはできなかった。

二人の子供と妻静枝との四人暮らしである。よく働いた。玄関横の待合室にテレビがある。十畳の治療室には塗^ぬりかえた白壁と清潔なベッドがある。それらはすべて南向きの窓をうけて明るい。「木田外科病院」と書いた白地に

黒のトタンの看板は、古幡の土手の向こうからも見えるように水潟川に沿った屋根の上に高々と掲げてあった。その看板は本線の汽車の窓からも見え、橋の上からも見えた。

木田民平はその日、滝堂部落の漁夫鵜藤治作の家へ治療にでかけた。

治作とその息子は奇病にかかっている。娘も奇病だったのだが、すでに前年の春に病院で死んだ。奇病は病因がわからない上に、治療方法もわからなかった。いったんかかってしまうと、死ぬのを待つしかないのだ。彼らにとつて、どうせ死ぬのならば病院にいるよりも自宅のほうが死に場所としてはよかったのだ。鵜藤治作は娘の死んだことで考えがかわり、息子の安次と二人で周囲のとめるのもきかずに病院を出てきたのであった。これが前代未聞の病魔にたいする治作の抵抗だった。しかし、漁夫である彼には烟は少ない。その上、漁業は中止状態である。収入は工場からもらった第一回の補償金と見舞金だけであった。妻のかねがつくる烟の芋が主食だった。彼女は烟仕事のあいまは看護にあたった。息子は手足が完全に不能になつてゐる。半廃人だが、治作はまだいくらもの言えた。ふらふらしながらでも、いくら歩けた。そのうちよち歩き

が、怪我のもとになったのだった。

十月初めのある日、庭先の蜜柑をもごうとして、治作は踏みはずして石垣の上から顛落した。右肘を骨折する重傷を負った。

木田は駐在所から電話をうけ、治作の治療にあたったのだが、それから今日までずっと治療に通いつめた。奇病患者の治作に憐憫を感じたせいもあったが、別に、木田にはある興味があつたのである。

それは、奇病患者を訪問してくる人間に関心をもつたことである。さいきんテレビまでがこの奇病の実態を報じたり、新聞雑誌がさかんに書きはじめた。爾来、治作の家にはかなりの来客がある。治作は言語障害をおこしてはいるが、少しはしゃべれたし、それに奇病患者を代表してものを言う気骨ももっている。木田が治療している日、関西から来た四十年輩の男が、「私は三年間水潟奇病のために深山にたてこもつて、特殊草根の栽培に成功しました。その草根から靈薬を発見しました。これを朝晩のご飯の上にばらばらとふりかけておたください。きっと快癒されると思います」と説明した。その男は靈薬仙丹草という漢方薬を置いていった。木田は見えて不快になった。

彼ら訪問者は、漁夫が朝飯も晩飯も喰っていると思つてゐるらしい。この山ふところの傾斜地に米はどこで作れる

のか。芋しかないのだ。妻は少しはとれる。食糧の大半は芋と魚なのである。魚が主食なのである——

その日の客は少しちがっていた。茶色の背広を着た都会風の男だった。三十歳前後だろう。木田が庭先に入ると、男は縁に坐って治作の妻のかねから何か話を聞いてノートに筆記している模様だったが、木田のほうを見てすぐにやめた。遠慮深げに会釈し、そのまま辞去して行った。やせた男である。新聞社の男かな、と木田はうしろ姿を見ながら思ったが、べつに話しかけなかった。すぐ治療にかかった。

「あんひとは誰だっじゃ」

男が見えなくなつてから木田は治作にたずねた。

「東京からきんさつたお医者さんじゃ」

「ふーん」

木田は消毒する手をやめて道路を見返したが、もうその男の姿はなかった。

「奇病の研究ばしにおいでなさつたとですげな」

「奇病の研究を？」

木田は治療をすませた帰りに部落を上がつて国道を走るとき、バスに乗る茶色の背広をみとめた。治作の家の縁先で男が木田を見た目つきは、陰鬱で、しかも光のある目だった。

翌日、木田は、その男と崖の上の道でまた出会った。男がオートバイの音でふりかえつたのである。バスを待っているらしい。木田は車上からちらと男の目を見た。やはり陰鬱な目つきだ。昨日よりも疲労感のでた弱々しい顔つきだった。男は木田に会釈したように見えた。

「今日も、滝堂でその医者に会つた」

夕食のとき、木田は妻に言った。

「東京から一人で奇病の研究にきているらしい。この病気もずいぶん有名になつたもんだ」

「大学のかたですか」

「治作の話によると、東京の保健所につとめているとかいう話だ」

「じゃ、まだお若いのね」

と妻は言った。

「ひまと金のある奴にはかなわん。湯王寺の温泉に泊まつて奇病部落の実態調査らしい。奈良屋にいたるか言つた」

「あんたも、たまには温泉につかりたいというんでしょ」

「そういえば、ずいぶん湯王寺にも行かん」

そう言つてから、ごろんと横になった木田は、新聞をひろげて急に目を光らせた。

「水濁にふたたび不穏な気配、二十日の漁民大会にダイナ